

第7回 球磨川下流域環境デザイン検討委員会 議事概要

日時：平成26年12月3日（水）14:00～17:00

場所：八代市商工会議所

■議事次第

1. 開会
2. 規約の改正
3. 委員長選出
3. 事務局からの説明
 - ・第6回委員会の議事要旨について
3. 議事
 - ・遙拝堰下流の瀬の再生に向けた河床デザイン検討について
水理模型実験視察（熊本高等専門学校 八代キャンパス）
 - ・萩原堤防のデザイン検討について
 - ・河口域・汽水域における水生生物ワーキンググループの検討状況について
 - ・今後のスケジュールについて
4. 閉会

■議事要旨

①遙拝堰下流の瀬の再生に向けた河床デザイン検討について

委) 施工に使えるような巨石が地域にどれだけあるのか調べるため、球磨川由来の巨石の公募を行っている。幾つかの石を組み合わせる方策はあるが、加藤清正が実際に使ったような大きな石を上手に活用しながら、流されないような構造物を造るのがベストである。

委) 土砂が堆積して州ができる場所は生物にとってはかなり良い環境で、模型実験で八の字の下流側の両岸に砂州がつくことが検証できたのは、成果として大きい。

委) 八の字を造った後のメンテナンスについて、十分な配慮が必要である。特に、洪水の流下阻害や施設に支障となる土砂の撤去等が考えられる。

●オブザーバー（球磨川漁協）から意見

国土交通省が発案された八の字の河床整正による瀬の再生に大変期待している。現在、遙拝堰から下には瀬が全然なく、アユの産卵場がほとんどないような状態である。これが整備されると、早瀬、平瀬、そして淵ができ、瀬の再生ができる。アユのすばらしい産卵場になると確信している。私ども漁協としては、一日も早く着工していただき、瀬の再生を実現していただきたい。

②萩原堤防のデザイン検討について

委) 資料 10 ページに「旧前川堰の敷石」とあるが、これは「萩原の敷石」だと思う。

これは細川三斎が人工的にあけてしまった川で、江戸時代には徳淵川と言っていた。前川というのは、あくまでも堤防の下のお城に水を入れる川であって、それはもうほとんど埋まってしまっている。

委) 勿ねは、説明のように2~3ヶ所ではなく、5ヶ所ぐらい遺っている。

委) 堤防に最初に植えたのは桜ではなく松で、江戸時代には植えておらず、細川三斎が八代に入って来てから植えたと言われている。八代城主であった松井直之が遺した歌にも、松堤が出て来る。だから、この整備に私たちは期待をしている。

委) 八代の水防にとっては一番大事な場所なので、一刻も早く整備してもらいたい。勿ねも、水の勢いが和らぐよう考慮してほしい。

委) 拠点 6 から拠点 7 へ行って、そこから遙拝堰直下の整備箇所而降りられるのか。八の字の整備箇所は、子供だったら、渇水の際は渡って向こう側に行きたがるような非常に魅力のある場所だと思う。

委) 子どもの頃は親しんでいた球磨川に、今、親水スペースがない。

●オブザーバー（八代商工会議所）から意見

本当にすばらしい事業だと思っている。これを生かしていく立場として、その内容を市民にどう発信していくのが非常に重要と感じている。

5月の九州国際スリーデーマーチ、夏のくま川祭り、秋の花火大会、妙見祭等、色々なイベントもまちづくりに活かしたい。また、学校関係、PTA、くま川祭り、スリーデーマーチ、花火大会の実行委員会のメンバーの方からも、斬新な意見が出てくるのではないか思っている。

整備後、ここがにぎわうためには、民間の力が必要になってくる。そういうところに対するプレゼンテーション等を行って行かなければならない。

地域活性化の事例として、アメリカのポートランドという田舎の方で、川を利用して若者が集まって来るようになった町の事例あった。毎週末に300人とか400人とかという若い世代の人たちが移住して来て、人口が少なかった町の人口が、30万人とか40万人に増えてきている。都会の方々から見ると自然というのはどうしても欲しいもので、移住の判断の非常に大きな材料の一つになったということだ。「良い生活環境がある」ということを発信していくのは商工会議所ではできないので、こういうものを早く発信できるようになればと思っている。

③河口域・汽水域における水生生物ワーキンググループの検討状況について

委) 下流域に土砂を還元するというのは、生物多様性を高める効果があると思うが、実は河口域の学術的な知見はまだ不足している。そういう意味で、土砂還元した後モニタリングを行い、その結果を見ながら次の管理に役立てていく、順応的管理型

の仕組みを作っていくのが望ましいと、ワーキングの中で議論している。

委) ワーキンググループは希少な生物についての情報等も含めて議論しているため、非公開である。ある程度方向性がまとまれば、さらに詳細な報告もできると思う。簡単に言うと、生き物が大変豊富で魅力のある球磨川の河口域において、どの生き物をこのエリアでしっかり保護し、さらによい環境を作って行こうか、それを専門性の高い方々に見ていただいて選ぶ作業をしている。その選ばれた代表種に対し、我々がどんな手を施せばその環境が守れるか、また、その方策の効果について、フォローアップする調査の手法、頻度等についても具体的にご指導いただいている。

●オブザーバー（八代漁協）から意見

アサリ漁場は、地盤高と、砂と泥の混合、潮流、波浪等の影響を受けながらできていたが、今は、干潟が低下し、アサリがほとんどいなくなっている。

中北地区の覆砂は、ちょうど漁協の事務所から対面の所にあるので、私もたまに双眼鏡で見ているが、少し大きくなってきたかなと、非常に期待している。

八代漁協の組合員の平均年齢は69歳で、年金生活の人達だが、漁協の組合員というのはその川の指標生物みたいなものじゃないだろうか。多くの生き物がいて、水揚げができる状況にならなければ、漁師は増えずにだんだん減って行く。

八代の海でとれるウナギは、知る人ぞ知る非常に高価なウナギであるが、絶滅危惧種に指定され、県も半年間はとらないことを決めた。ウナギが住める護岸等を造って還流を増やし、ウナギを増やすような整備していただくと非常にありがたい。これは球磨川漁協さんにも言えると思うが、ウナギと一緒に漁業者が消滅しないようにしていただきたい。

③今後のスケジュールについて

- ・ 次回の委員会は、3月に開催したい。

—以上—